

「男、突っ走る！」

第
101
回

第
一
稿

作・壽倉 雅

1 中央公民館・全景

2 同・ホール

スクリーンとプロジェクターが準備されてお
り、佐代子と洗が設営をしている。

茉奈が、デザートを作っている――本村が感心するよう
に見ている。

本村「すごいね、茉奈ちゃん」

茉奈「名物メニューにしようかと思って」

本村「四月だっけ、カフェのオープン」

茉奈「ええ。今、お母さんと一緒に目下準備

中です」

本村「佐代子ちゃんも、よくやるねえ、いろいろと」

テーブルとイスがいくつも用意されており、テーブルにはビュッフェ形式で料理が既に用意されている。

既にキャストたちが何人か集まって、談笑している。

ドアが開き、美穂子がピザを運んでくる。

美穂子「ピザ届きましたよ」

佐代子「ありがとうございます」

3 同・ホール前の廊下

テーブルで受付をしている雅也——美央と裕作がやってくる。

雅也「ほい、お疲れ。（と名簿にチェックして）一人二千円ね」

美央、財布を出そうとすると、

裕作「良いよ、俺が出すから」

美央「ありがとう」

雅也「ふう、さすが。（とお金を受け取ると

美央に）理央は？」

美央「今、表でアリサちゃんたちと遊んでるよ」

雅也「そっか。まだスタートまで、ちょっと時間あるから、中で待ってて」

美央・裕作「はい（と中へ入っていく）」

と、翔子がやってくる。

翔子「あら、うちー、幹事ご苦労様」

雅也「翔子さん、お疲れ様です」

翔子「二千円だったわね？」

雅也「はい」

翔子「（お金を渡すと）両替しようか？ 千

円札ばっかだと、最後大変でしょ」

雅也「良いんですか？」

翔子「良いわよ。私、細かいのほしいから」

雅也「すいません」

4 同・ホール

スクリーンに、『神様が願うまで』の本番の映像が流れている——それを見ながら、食事や談笑をしている雅也、佐代子、茉奈、山中、田所、本村、橋岡、住吉、直海、美央、緑、愛花、寿梨、翔子、洗、ゆりえ、裕作、まひる、藍那、泰明、美穂子、千世、亜里沙、隆太、翔、理央、その他キャストやス

タッフたち。

山中「（愛花に）そっか、大学の同期たち劇団立ち上げるのか」

愛花「はい。まだ準備段階なんですけど、またヤマさんにいろいろ相談に乗ってもらいたくて」

山中「良いぞ、いくらでも教えるさ。（と緑に）ミドリさんも、最近どうですか？」

緑「仕事の方が忙しくて、主人と一緒にしばらく劇団の活動は休もうと思って」

山中「阿川さんもお忙しそうですからね」

緑「まあ、また復帰して、舞台公演が決まったらお知らせします」

隆太が雅也の膝の上に乗っており、一緒に食事をしている。

雅也「りゅーた、この間はビデオメッセージありがとうございます」

隆太「うちーも、ビデオメッセージありがとう」

雅也「あの日、家に帰ってからすぐ録ったの。」

なるべく早く、りゅーたに見てもらいたくてね」

と、泰明、まひる、藍那がやってくる

と、

泰明「こうして見ると、本当に、うちーとりゅーたは年の離れた兄弟みたいだね」

まひる「うちー、りゅーたが可愛くてしょうがないんじゃないですか？」

雅也「そりやそうだよ。うちの弟もさ、昔はお兄ちゃんなんて甘えてきたのに、今じゃ『兄貴』なんて言うようになって、可愛げなんてありやしない」

藍那「うちーさん、例の件、またお願いしますね」

雅也「ああ、そうだね。二十日前後とか、大丈夫？」

藍那「はい。また連絡します」

まひる「何かあるの？」

藍那「また教える」

泰明「さすがは、カップルだね」

と、直海と寿梨がやってくると、

直海「うちーのお菓子、美味しかった」

寿梨「お菓子作ったって、よくSNSあげて
たもんね、ようやく食べれた」

泰明「え、うちー、どれ作ったの？」

寿梨「(テーブルを指さして)あのチョコレ
ートケーキですよ」

雅也「炊飯器で作れる、簡単チョコレートケ
ーキです。今度カフェをオープンする国枝
さん親子もいらっしやるのに、手作りのお
菓子持ってくるのもどうかと思ったんです
けどね」

まひる「やっさんの分も持ってきますよ。」

(と藍那に) 藍那ちゃん、行こう」

藍那「うん」

と、まひると共に去っていく。

直海「(雅也に)うちー、私、養成所受か
ってね、四月から東京に行くことになった」

雅也「本当ッ……？ それは、おめでどう」

泰明「ナオちゃんも頑張ってるんだね」

雅也「やっさんは、しばらく舞台には出ない
んですか？」

泰明「それがね、僕、一月から住吉先生のと
ころでダンスを学ぶことにしたんだよ」

雅也・直海・寿梨「えッ……？」

田所、橋岡、住吉、美穂子、千世が話
している。

田所「そうですか、年末に旗揚げ公演を」

住吉「同じ師匠から教わった、言わば同輩た
ちと一緒にやろうと思いましてね。まだこ
れからどうなるのかは分からないんですけ
ど、ここ一年近くはずっとその準備もして
て」

橋岡「それで、今回の作品でも振付指導をさ
れたんでしょ。その情熱はすごいですね」
美穂子「普段のダンスレッスンもありますか
らね。本当にいつ休んで、いつ振付覚えて
るんだろうって、娘と感心してたんですよ」
千世「教えながら、自分も覚えるって、私じ
やまだそんなことできない」

住吉「あんたは、まだまだよ」

千世「はい」

住吉「(田所たちに) まあ、お恥ずかしい話、私はダンスしか取り柄がありませんからね。養成所にいた頃は、演技も学んでましたけど」

洗、ゆりえ、理央が話している。

ゆりえ「ねえねえ、理央ちゃん。お姉ちゃんって、いつからゆーさくと付き合ってたの？」

理央「分かんない。お姉ちゃん、家じゃ全然そういう話しないから」

洗「まあ、いくら妹でも、さすがに小学生相手だと、恋愛話なんてしないか」

ゆりえ「私も、そろそろ相手見つけないとなあ」

洗「すぐ見つかるだろ、ゆりえなら」

ゆりえ「そうかなあ」

× × ×

会が終わり、佐代子が挨拶をしている。

佐代子「本日は、『神様が願うまで』の打ち上げにご参加いただき、ありがとうございます。ありがとうございました。今日はですね、皆さんにご報告が二つあります。一つ目は、もう既にご存知の方もいらっしゃると思いますが、この度の娘の茉奈と共に、カフェをオープンするこゝとになりました。予定では四月オープンを目標に、今諸々準備をしているところです。その時はぜひ、皆さんのご来店をお待ちしています。続いて、もう一つ、発表があります。(と住吉に) 住吉先生」

住吉「はい(と佐代子の隣に来る)」

佐代子「ええ、これまで『スリジェネ』は一つの演目に向けて、その都度稽古をする劇団のようなスタイルを取ってきました。ですが、この『神様が願うまで』以降、何も予定が立っていませんでした。そこで、住吉先生と相談をさせていただき、年明け一月から毎週土曜日の午前中、住吉先生のダンススタジオをお借りする形で、『スリジ

エネアカデミー』として、週に一回の習い事というスタイルに方針転換することになりました。基礎レベルを上げる目的に、演技やダンス、歌を専門の講師陣に教わるスクールに近い形になります。詳細は近いうちに全体LINEにアップしますが、他に聞きたいことがあったら私か住吉先生にご相談ください。ちなみに、今の段階でやりた
いよって方、いらっしゃいますか？」

と、亜里沙と翔が勢いよく手を挙げる。

亜里沙「私、やりたい！」

翔「俺もやりたい！」

と、まひるもゆっくり手を挙げると、

まひる「私も、ぜひやりたいです」

雅也の膝の上に乗っている隆太が手を挙げると、

隆太「俺もやる！（と雅也を見て）うっち

ーは、やらないの？」

雅也「……」

隆太「うっちーもやろうよ」

笑ってごまかしている雅也。

5 木内家・雅也の部屋（夜）

事務仕事をしている雅也——ふと手を止めると、隆太の言葉が蘇る。

×

×

×

（フラッシュ）

隆太「うっちーもやろうよ」

×

×

×

雅也「……」

6 駅・改札口前（数日後・夕）

雅也、雪奈、裕司、その他友人たちが待っている。

N「それからしばらく経ったある日、僕は専門学校のメンバーと共に、駅前で開催される飲み歩きイベントに足を運びました」
と、改札口から篤志がやってくる。

篤志「お待たせ」

雪奈「お疲れ」

裕司「おっつー」

雅也「お疲れ、あつぽん。このイベントのためだけに、よく京都から来たね」

篤志「俺は、どんな飲み会だろうが飛んでくるさ。しかもこのメンバーで酒飲むんだから、何としてでも行くさ」

雪奈「さすがは、あつぽん」

雅也「じゃあ、早速行きますか」

7 居酒屋（夜）

雅也、雪奈、篤志、裕司、その他友人たちがそれぞれ飲んでいる。

雅也「今年ってさ、やたらと集まる機会多かったよね」

雪奈「確かに。だってこの間、グランピングで集まったばかりだし、その前はお盆前に飲み会やったでしょ。それにさ、グランピング行くちよっと前、私、うちーと一緒に立ち飲み居酒屋行ったもんね」

雅也「行ったね」

篤志「え、それ聞いてない」

雅也「あ、あれはね、俺が仕事で名古屋にいたから、たまたま会おうってことになってさ」

篤志「ズルいな、それは」

雅也「ごめんごめん」

裕司「あれ、四月だっけ？ バーベキューやったよな」

雪奈「ああ、やったわ」

雅也「そうだそう。午前中に、ボルダリングやって、昼から常滑まで行ってバーベキューしたんだよね」

裕司「そうそう。俺、午前のボルダリングは行けなかったの覚えてるもん」

雪奈「すごかったんだよ、あの時のあつぽん」

8 ボルダリングジム（回想）

雅也、雪奈、篤志たちがボルダリングをしている。

雅也と雪奈、低いところで落ちてしま

う。

雪奈「ああ、ダメだ。全然行かない」

雅也「しかもさ、落ちたら怖いっていう恐怖心もあるよね」

雪奈「分かる。命綱とかあれば、ちよつと高いところでも何とかいけそうだけどさ」

が、篤志は軽々と高いところまで登っている――雅也と雪奈、唾然顔で見上げる。

雅也「あつぽん、凄すぎだろ」

雪奈「大丈夫？ 気を付けてよ」

篤志「（登っていきながら）これぐらいちょろいって」

と、頂上まで登ると、そのまま地面に颯爽と着地する。

篤志「オツケー、クリア」

雅也「すげえな」

雪奈「あつぽんは、何でもやっちゃうんだね」

9 居酒屋（回想戻り）

雅也「すごかったな」

雪奈「私たちなんて、全然できなかつたのにね」

雅也「大変だったのは、その後だって。ほら、バーベキューの乾杯のとき」

10 バーベキュー会場（回想）

缶ビールを持って乾杯する雅也、雪奈、篤志、裕司たち。

一同「かんぱーい！」

雅也、缶のプルタブを開けようとするが、指が震えていて開かない。

裕司「どうした、うちー？」

雅也「指に力入んない……」

雪奈「あ、もしかしてボルダリングの筋肉痛が来たんじゃない」

雅也「間違いなく、それ」

篤志「しょうがねえな、貸してみな（と缶のプルタブを開ける）」

雅也「ありがとう」

× × ×

ショット酒の瓶を並べている裕司。

裕司「よし、これ飲むぞ」

雅也「おっくー、これってめちゃくちゃ強い

お酒じゃない？」

裕司「そう、アルコール度数九十六」

雅也「ダメダメダメ。こんなのアウトだって」

雪奈「水用意すれば、何とかいけるんじゃない

い」

雅也「俺、後にするわ」

篤志「よし、じゃあ俺と植野さんで行くか」

雪奈「良いよ」

と、雪奈と篤志、ショット瓶の蓋を開ける。

雪奈「うっちー、水用意して」

雅也「はいよ」

と、紙コップに水を注ぐ。

雅也「さあ、いつでもどうぞ」

雪奈「じゃあ行くよ。せーの」

と、篤志と共にショット瓶を一气飲み

する。

雪奈「ああ……喉焼けそう」

雅也「はい、ゆきちゃん水（とコップを渡

す）」

雪奈「ありがとう……。うわ、これキツイわ」

裕司「じゃあ、次、俺とうっちー行くか」

雅也「オツケー」

篤志「じゃあ、水用意しとくわ」

雅也「ありがとう」

と、ショット瓶の蓋を開ける雅也と裕司。

篤志「（紙コップを持って）はい、こちらは

準備オツケー」

雅也「じゃあ、おっくー。行きましょう」

裕司「よし」

雅也・裕司「せーの」

と、ショット瓶を一气飲みする。

裕司「うわあ……」

雅也「ああ……。あつぽん、水」

篤志、手に持っていた紙コップの水を

飲み始める。

雅也「（絶句して）あつ……ぽん……」

と、走って水道まで向かい、勢いよく口をゆすぐ——大爆笑している篤志。

雅也、疲れ切った顔で戻ってくる——

篤志、紙コップに水を入れて、雅也に渡す。

篤志「はい、うちー水」

雅也「遅いわッ！」

11 居酒屋（夜）

雅也「あつぽんと知り合って五年近く。あの時、初めてあつぽんに対して殺意が沸いたわ」

篤志「めっちゃ、俺のこと睨んでたもんね」

雅也「そりゃ睨むさ。こっちは喉焼けるところだったんだから」

篤志「すいませんでした」

裕司「来年も、また集まると良いな。多分、今年が最後だろ」

雪奈「まあ年末、あるいは年始の飲み会かな」
篤志「良いんじゃない？ この際、もう年末
も年始も両方やっちゃえば」

雪奈「そうだね。（と雅也に）どう、うち
ー？」

雅也「もちろん、両方参加します」

篤志「さすが社長ッ！」

雅也「やめなさいって、その言い方」
笑い合う一同。

12 木内家・全景（数日後）

13 同・雅也の部屋

雅也がスマホを見ている——隆太を抱
っこしている写真が映っている。

× × ×

（フラッシュ）

× × ×

中央交流センターのホール。
猫の衣装で踊っている隆太。

× × ×

中央交流センターの搬入口。

泣いたまま雅也から離れない隆太。

× × ×

中央公民館のホール。

一緒に食事をしている雅也と隆太。

× × ×

雅也「……」

と、再び、隆太の声が蘇る。

隆太の声「うちーもやろうよ」

と、電話をかける雅也。

雅也「もしもし、国枝さん。おはようござい

ます。突然連絡しません。実は……『ス

リジェネ』を卒業するという話を撤回して、

『スリジェネアカデミー』に参加させてい

ただきたいんです」

つづく